



聡子さん





# 目次

|                         |    |
|-------------------------|----|
| プロローグ . . . . .         | 1  |
| バスが冷たくなった日 . . . . .    | 2  |
| 市役所に犬の事を相談する。 . . . . . | 5  |
| 聡子さんとの初対面 . . . . .     | 6  |
| デイサービス . . . . .        | 7  |
| 聡子さんに引っ越し前の町 . . . . .  | 9  |
| エピローグ . . . . .         | 10 |



## プロローグ

私は何処にいるのだろうか、どうもはっきりしない。だれか車いすでやってきたようだ。〇〇さんは、今日から週に一度こちらにお世話になります。名前がはっきりと聞こえなかったわ、でも車いすに乗っているあのおばあさんを見ると私が以前何をしていたのか思い出せそうだわ。昔、私も仕事をしていたように思う。

## ベスが冷たくなった日

私は長期の休暇を過ごした後、一人暮らしのおばあさん、聡子さんの家に仕事をするため戻りました。

聡子さんの様子がいつもとは違いました。私を喜んで迎え入れてはくれたのですが、家の中には重苦しい雰囲気が漂っていました。おばあさんは私にこう言いました。「ベスが冷たくなっているのよ！」

ベスというのは、聡子さんと一緒に暮らしている犬の事です。休暇前に私はベスに聡子さんの世話をお願いしていました、なにか異常があっても、この犬が近所の人に知らせてくれるだろうと、ちょっと期待していたのです。

私たちは飼っている犬が冷たくなっているのを発見し、すぐに動物病院に連れて行きました。

動物病院へ行く途中で、近くにいた警察官に声をかけられた。

「今から、犬を病院へ連れていく処です、おまわりさんは何かお探しですか？」私が尋ねると、警察官は答えた。

「いいえ、ただの巡回です。市民の安全を確保するために、こうして街を巡回しています」

私は、一緒に同行してもらえないかと期待して、もう一度尋ねた。「そうですか、時間があれば一緒に病院へ動向してもらえませんか？」

警察官は微笑みもせず、定型句を返した。「私は警察官として、市民の安全を確保するためにここにいます。何か事件があればすぐに対処します。」

私は少しがっかりした様子で、警察官が去るのを見送った。しかし、その後すぐにもう一人の警察官が現れた。

この警察官は、先程の警察官とは異なり、にこやかな表情で挨拶をしてきた。  
「こんにちは、どうされましたか？」

私はほっとして、警察官に動物病院まで同行をお願いしてみた。  
この警官は、さっきの人とは違い、同行を快諾してくれた。警察官と道すがら世間話を始めた。警察官は、自分が警察官になったきっかけや日々の仕事について話し、男性は自分の仕事や趣味について語った。

話が盛り上がっていると、先程の警察官がやってきた。私は、この警察官が慇懃無礼であるとすこし気を悪くした。

先程と同じように、警察官は定型句を返し、そのまま去っていった。

同行してくれている警察官が、お詫びをしてくれた。あいつは仕事熱心で、犯人を捕まえたことも何回かあるんです。ちょっととっつきにくい面があるのは確かです。(まさか、アンドロイドとは言えない。)

私は、さっきの警察官の事を考えようとしたが、今は犬の事で頭がいっぱいだ。犬も死んだようにぐったりしており、ずいぶんと重く感じる。

動物病院へついて、早速見てもらうと、犬をみてちょっと触ったあとに、獣医は私たちに驚くべき事実を明らかにしました。犬は実はロボットで、電池が切れてしまっていたのです。

私たちは最初は信じられませんでした。犬は聡子さんにとって家族のような存在であり、多くの愛情を注いで育ててきました。しかし、獣医の説明を聞いて、私たちは犬がロボットだという事実を受け入れざるを得ませんでした。

私たちは何が起こったのかを調べ始めました。やがて、私たちはおばあさんが、引っ越してきた時に、市が聡子さんの為に手配した犬ロボットで有ることが解りました。彼女

が寂しくないようにと市が、犬のような存在を手配してくれていたのです。

市役所に犬の事を相談する。

ベスが故障してしまったことが解った私は、聡子さんの意向である、このロボット犬が大切という事から、修理することにした。

修理の相談で翌日、市へ訪問し、紹介された修理店へ行ってみた。

私はベスを手荷物として持ち、ロボット修理店へと向かった。そこで彼は修理スタッフにベスを渡し、修理の見積もりを受けた。スタッフは、ベスの電源がすでに耐用年数を超えていることを告げ、新しいロボット犬を購入することを提案した。

私は素直に、ベスを諦めることにした。新しいロボット犬を選ぶことになり、スタッフにアドバイスを求めた。スタッフは、最新のロボット犬を提案し、その性能の高さに私は感動した。今度のロボット犬は、人の言葉を話すことも出来るのだ、私は、ベス以上にすごい性能を持った新型ロボット犬を選んだ。

市の職員にも了解を得て、聡子さんの家に連れて帰る。

新しいロボット犬は、ベスよりもはるかにスマートで、かわいらしい外見だった。聡子さんは最初は戸惑ったが、徐々に新しいロボット犬にも愛着が湧いているように見えた。新しいロボット犬は、ベス以上に活発で遊び好きだった。

聡子さんはロボット犬を大切に扱い、家族として暮らしている。聡子さんは、新しいロボット犬も、同じ様にベスと呼んでいる。

ベス：「Hi、私ハズス」

犬ロボットが家に戻ったとき、聡子さんは大喜びしました。犬ロボットのベスが聡子さんを安心させ、彼女の寂しさを癒やすことができたからです。

## 聡子さんとの初対面

市役所の受付、そこは今では人が受付をすることもなくなっており、大きなディスプレイが置いてあるだけだ。携帯電話で諸々のやり取りは可能だが、今日は、市役所へ出向いて、ディスプレイに電源が入るのを待っていた。

ディスプレイに若い女性の顔が出てくる「こんにちは、市役所の労働介護課です。私たちは独居老人の方々を支援するために、ヘルパーを募集しています。あなたには、新たに引っ越してきたおばあさんのお世話をお願いしたいと思っています。彼女は聡子さんといいます。」

私は、介護関係の仕事を希望しており、やっと来たチャンスを手に入れることが出来ると、この依頼を受けることにしました。

翌日、私はおばあさんの家を訪問しました。

彼女は犬を飼っており、私が到着すると、犬は私に吠えかかってきました。しかし、おばあさんは私を暖かく迎えてくれました。彼女はとても親切に接してくれました。

「大丈夫ですよ、ここ（頭を指して）はちょっと弱くなったけどねえ」挨拶の言葉は、あまり噛み合っていなかったが、定期的に訪問する事は了解してくれた。

私は話をしながら、家の中を見学しました。おばあさんの家はとても古く、少し汚れていました。

聡子さんは、市役所での事前の情報どおり。認知症でした。私が彼女を訪問するたびに、彼女は私を初めて会ったかのように振る舞っていました。しかし、私は彼女が認知症にかかっていることを知っていたため、彼女の振る舞いには驚かなくなりました。

彼女は犬と暮らしていましたが、犬の世話をすることができず、犬には私が面倒を見るようになりました。

## デイサービス

私は、週に一度、聡子さんをデイサービスに連れていく。

ある日、一緒に施設の中に入ってみた。

デイサービスに到着した聡子さんは、いつものように、周りの人たちと打ち解けている。

私は安心して、帰り支度を始めた。

その時、認知症のおじいさんが、おばあさんを見つけて駆け寄ってきた。

「聡子さん、聡子さん！ 待ってましたよ！」

聡子さんは、いつものようにニコニコしている。

「このおじいさん、誰ですか？」

私が聞くと、おじいさんは自己紹介をした。

「私は若い頃、聡子さんの家でお手伝いをしていた男です。彼女はとても優しく、家族のように接してくれました。私は今でも彼女を慕っているのです。」

聡子さんは、相変わらずニコニコしてる。

「でも、おじいさん。今はデイサービスに来ているんですよ。」

私がそう言うと、おじいさんは驚いたように目を見開いた。

「そんなことは知りませんでした。でも、聡子さんは私を必要としていますよ。今でも、私は聡子さんを見守っていきますよ。」

私はおじいさんと聡子さんの関係が、良く解らず心配なので、しばらく一緒に過ごすことにした。

おじいさんは、聡子さんがデイサービスに来たのを、玄関で見つけたら、すぐに駆けつけてきたのだった。彼女のことを思う気持ちは、今でも変わらないようだった。

数時間後、帰る時間となった事をおじいさんに話すと、おじいさんは泣きながら別れを告げた。

「聡子さん、本当にありがとう。私はまた会える日を楽しみにしています。」

聡子さんも、おじいさんと別れるのが寂しくて、涙を流していた。

デイサービスのスタッフは、こっそりと私に言った。「毎週こうなんですよ。」

私はその光景を見て、ほろりと心が温かくなった。認知症のおじいさんが、おそらく作り出した昔の思い出にしがみついているのを見て、昔、聡子さんを世話しているとう幻想が生きがいになっているのだなと思った。

## 聡子さんに引っ越し前の町

なんとかして、聡子さんの引っ越し前の住所を突き止めた私は、半ば強引に、聡子さんとその町へ行ってみた。

不思議な事に、デイサービスで会ったおじいさんが以前住んでいた場所と、聡子さんが引っ越し前の住所は同じ町だった。

私と聡子さんは昔住んでいた家に向かい、近所を散策し始めました。そこで、聡子さんが以前暮らしていたときによく出会っていた人たちと再会しました。

最初に出会ったのは、川で釣りをしており、聡子さんを見つけて声をかけてきました。おっさんは彼女を見て、驚きの声を上げました。「おや、聡子さんだね！何年ぶりだろう私は髪もこんなに白くなったのに、あなたは変わらないねえ」と言いました。

聡子さんはいつもの様にこう返事しています。「皆様のおかげです、ありがとうございます。」

聡子さんは、おっさんと握手を交わしていました。きっと懐かしい思い出がよみがえっていることでしょう。

その後、聡子さんは、別のご近所さんたちとも再会しました。昔話や近況を聞き、楽しい時間を過ごしました。

私は、ここでも聡子さんの生活があったのだなと、当たり前の事を思っていました。

引っ越しの以前の町を再訪したことで、彼女は過去と現在をつなぐ思い出を作ったはずですが、そして私は改めて、聡子さんの未来と一緒に作るに勇気を得て、新たな思い出を作っていくことを決意しました。

## エピローグ

私は、施設の中で、〇〇さんが帰る処を見ていた。

そのおばあさんは、無事に家に帰ることができたようだ。おばあさんは一人暮らしで、犬を飼っているようで、利口そうな犬が迎えに来ていた。

ベス：「オカエナサイ、聡子ちゃん」



---

聡子さん

---

著 おうばく

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---